

「基本高水」選定のための論点の整理（総合治水WT）

1. 昨年 9 月に選定した「2つの基本高水」の設定と一本化の範囲

$3600\text{ m}^3/\text{s} \sim 4000\text{ m}^3/\text{s}$ （s57型の降雨パターン = $3800\text{ m}^3/\text{s}$ の仮設定）

$4000\text{ m}^3/\text{s} \sim 4500\text{ m}^3/\text{s}$ の空白ゾーンは？

$4500\text{ m}^3/\text{s} \sim 5000\text{ m}^3/\text{s}$ （s57型の降雨パターン = $4700\text{ m}^3/\text{s}$ の仮設定）

のいずれを選択するか？ 中間の値の選択はありうるか？

S57型、H16型は流域田対策等の効果量試算のために仮に設定した降雨パターンと基準点流量。

2. WTで検討した「基本高水の選定」に関する確認

1) 基本高水を治水対策が可能な範囲に限定する考え方は筋が通らない。採用しない

基本高水の選定にあたって、治水対策を念頭に置いて数値を考えることは必要である。

2) 畑委員案による基本高水の算出方法についての再検討

・畑委員案は「流量を重視し、実績降雨をベースに流量を算出する方法」で、将来、蓄積された流量データをもとに算出する有力な方法で、将来課題とする。

・流出解析WTで提案してきた方式は、流量データが乏しい状況下では「100年に一度起こる降雨量の雨がもたらす洪水」を算出する方法で、畑委員案とは定義が異なる。

・畑委員案を参考値として試算する方法も検討したが、整合性をもちにくいとして今回は採用しないことにした。

3) 他の河川における基本高水設定方式との比較

・基本高水については長年にわたり議論されているが、決定的な結論が出ていない。武庫川流域委員会では長時間をかけて基本高水の解析や問題点について議論をかさね、一般の目からはブラックボックス状態にあった基本高水の決め方を市民の目線まで降ろしてきた。これ以上、時間をかけても短時日には新しい方式を編み出すことは難しい。

・全国的にも注目されている「淀川方式」と比べても、武庫川方式は

雨から計算する

流量チェックをして検証する

既往最大流量との整合性を図る

作業を経て総合的に判断するプロセスを踏んでいる。

残る論点は、以下の2点のとらえ方が大きく関わってくる。

過去に設定し法律で定めた工事实施基本計画の基本高水（ $4800\text{ m}^3/\text{s}$ ）との比較を、どう考えるか？

財政的な制約等から「実際には対策を取れないような大きな値を設定すること」の可否

3. どのように数値を決めるか？

1) 基本高水の定義を明確にして、筋を通せる値を見出す

2) 選択する数値は上記 ~ の幅の中にある。（ほどほどの数値の選択？）

3) 基本方針の中に、目標数値や基本高水に対応する治水対策をどのように位置づけるか。

基本方針で表現する対策の精度（担保性）とのかかわりが重要になってくる。

基本方針のあり方